

書評…日本カトリック司教協議会『今こそ原発の廃止を』編纂委員会

『今こそ原発の廃止を―日本のカトリック教会の問いかけ―』

カトリック中央協議会、二〇一六年

川 上 直 哉

二〇一一年三月十一日という日は、おそらく長く忘れられることのない日となるだろう。地震と津波を契機に「原子力発電所爆発事故」が起こった。そのことが、大きな（そして不気味な）意味をこの日付に与えた

その出来事は、その大きさをゆえに、未だぼんやりとしか見えてこない。現代世界に浸透する「放射能」への忌避・恐怖故に、「核兵器を持てば攻められることはない」と信じる国家がある。原子力禍とは、そのようなものであつたはずだ。しかしそれに直面した私たちは今、その事象そのものを正しく見ることができないでいる。環境省の公表データによると、放射性の「指定廃棄物」は十二都県に計十八万トン（二〇一六年九月三十日現在）あるが、その内訳は「公表しない」で済まされている（まさのあつこ『あなたの隣の放射能汚染ゴミ』集英社新書）。事柄が深刻で大規模すぎるために、私たちはそれと向き合うことができていない。向き合えないうちに、事態は矮小化され深刻になっている、予感におびえる。

どうしたらよいのか。二つの道があると思う。それは「信仰」と「対話」だ。

どこまでもあやふやに見える事象の、その「向こう側」つまり「超越」と接続すること。そうして動揺を抑え、事

日本カトリック司教協議会『今こそ原発の廃止を―日本のカトリック教会の問いかけ―』

柄に向き合う腹を据える。それが「信仰」の道である。

同じ課題の中で踏みとどまる人々と語り合うことで新しい可能性を模索すること。そうして「信仰」がもたらしがちな固陋を退け、柔らかさを保持する。それが「対話」の道である。

二〇一六年十月にカトリック中央協議会が発行した『今こそ原発の廃止を―日本のカトリック教会の問いかけ』（以下、本書と記す）は、この二つの道を一步一步と進む貴重な足跡となっている。

「わたしの主よ、あなたはたたえられますように」というアシジの聖フランチェスコの言葉の冒頭をタイトルに用いた二〇一五年の回勅「ラウダート・シ―共に暮らす家を大切に」を基盤とし、その勧めに耳を傾けつつ、二〇一一年十一月八日に日本カトリック司教団が宣言した「脱原発メッセージ」を改めて受け止め、「何を学び、どうすべきか」を議論したのが本書である。そこには現実をまっすぐ見つめる強靱さがある。それは「信仰」のもたらす成果だ。そしてその強靱さこそ、今、多くの人が潜在的に期待しているものだろうと思う。

他方で多くの人は、そうした強靱さに期待を寄せながら、恐れを感じている。「九・一一」という数字で覚えられイメージされ続けている宗教の凶暴さは、今、ロヒンギャ問題を通じて改めて世界で確認されている。そうした中で、宗教者が他宗・他教派と率直に対話し協働することができるなら、それはそれだけで、平和を発信する機会ともなる。プロテスタントのみならず他宗教の動向にも学ぼうとする本書は、その実践の記録にもなっている。たとえば、二〇一五年七月、私はイエズス会岐部ホールに招かれた。プロテスタントと正教によって構成される「世界教会協議会」の声明「核から解放された世界へ」についての報告を、「平和のための脱核部会」から求められていることだった。私は声明についての説明に加え、「ウラン採掘」から「廃棄物処理」までの長大なラインのすべてにおいて起こる無数の被ばく被害者の国際連帯が必要であることを強調した。その成果ははっきりと、本書に確認

される。

実際、原子力⇨核エネルギーの問題を前にすると、気が遠くなる。私が強調した地球規模の歴史的社会的な問題と同時に、「一兆分の一ミリメートル」という微細な世界の物理法則への人為的介入の問題も、取り扱わなければならない。原田雅樹神父や島蘭進教授の息遣いが聞こえる気がするほど、本書は専門的な事項が丁寧に説明されている。索引も参考文献表も充実している。原子力⇨核エネルギーの問題を議論するための参考書としても、大変優れている。

しかし本書は、対話呼びかける「問いかけ」の書である。そこに意味がある。原発事故は、現在進行形の課題なのだ。私たちは過去の議論を学ぶことにとどまっていられない。対話を続けなければならない。本書は「問いかけ」をもって対話を求めている。それに応えてこの書評を閉じよう。

今年（二〇一七年）、山口県の「花咲く郷祈りの家」から、「和歌山の太田神父様からの言付かり資料」をいただいた。「フクシマ五年目の神学」と題した論文だった（カトリック大阪教会管区『部落差別人権活動センターたより』春号二〇一六年四月No.四十三）。そこには、本書が基盤としている「ラウダート・シ」についての目の覚めるような紹介があった。人間に与えられている「大地・自然への支配権」の放棄が、そこに語られている、というのだ。早速、「ラウダート・シ」を読み直してみた。「復興」の掛け声賑やかな福島県の現場で読んでみた。

福島は、確かに今、復旧している。「困ったら、予算をとってくる」という旧来の姿に復している。「後のことは考えずに、ハチマキしめて！」頑張って中央に議員たちが乗り込む。そうした姿を「桃太郎主義」という。「桃太郎主義の復興」。それもまた、おそらく「人間の復興」を目指している。そういえば、福島県浜通り地方の貧困と過疎の村々が「桃太郎主義」で頑張った成果こそ、原発誘致だった。それもまたきつと、「人間の復興」を目指し

たものだったのだと思う。

本書は、その冒頭部分に「人間の復興」を掲げて議論を展開していた。そしてその結末部分に「ラウダート・シ」を掲揚する。福島現場で、それは奇異に感じる。議論を最後まで読み終わり、もう一度最初に戻って考える。私たちは、問い直さなければならないのではないか。「聖書は、他の被造物のことを気にもかけない専制君主的な人間中心主義を正当化する根拠にはなりません」と、「ラウダート・シ」の六十八項に記されている。福島現場が、このことの更なる神学的考察を求めてくる。例えば「フィリピの信徒への手紙」に記されたケノーシスの歌には、「人間とはみなされていなかった」奴隷や女性たちを「尊敬する仲間」とするよう求めたパウロの思いがみなぎっていたのではないか、等々…。

本書が放つ問いかけに応答する対話が、これから豊かに展開することを期待してやまない。

(仙台キリスト教連合被災支援ネットワーク・東北ヘルプ事務局長)

本学非常勤講師 日本基督教団仙台北三番丁教会担任教師)